河内長野市文化財調査報告書第46輯
河内長野市埋蔵文化財調査報告書XXV

三日市北遺跡 Ⅲ

２００７年３月

河内長野市教育委員会

序　　文

大阪府の南東部に位置する河内長野市は、豊かな自然に恵まれ、高野街道に代表される和歌山や奈良へ向かう街道の要衝として発展してきた街です。このため、市内には数多くの文化財が残されています。

この様な河内長野市も、大阪市内への通勤圏に位置しているため、住宅都市として発達してきました。この住宅開発がもたらした文化財や自然に対する影響は大きなものがあります。特に、地下に眠る埋蔵文化財は、開発と直接的に結び付く大きな問題です。

遺跡に託されている河内長野の先人達のメッセージである文化遺産を保護・保存し、現在の、更には未来の市民へと伝えていくことは、現代に生きる私達の責務であります。河内長野市に於いては、重要な課題である開発と文化財保護との調和のため、開発に先立ち埋蔵文化財の発掘調査を実施し、その把握に努めています。

本書は、発掘調査の成果を収録しています。皆様が先人達の残したメッセージの一部でもある文化財に対するご理解を深めて頂くと共に、文化財の保護・保存・研究するための資料として活用して頂ければ幸いです。

これらの発掘調査に協力して頂きました施主の方々の埋蔵文化財への深いご理解に、末尾ながら謝意を表すものです。

平成19年３月

河内長野市教育委員会

教育長　福　田　弘　行

例　　言

1．本報告書は、平成17年度に行われた三日市町駅前市街地再開発事業及び三日市町駅周辺整備事業に伴う三日市北遺跡・三日市宿跡（ＭＩＮ05－３・ＭＩＮ05－４）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査及び内業整理は、河内長野市教育委員会が行った。

3．調査にかかかる費用は、三日市町駅前市街地再開発事業については全額を国土交通省の補助を受けた河内長野市が負担した。三日市町駅周辺整備事業は河内長野市が負担した。

4．発掘調査は、河内長野市教育委員会社会教育室社会教育課参事尾谷雅彦、同課太田宏明（ＭＩＮ05－３・ＭＩＮ05－４）を担当者として実施した。

5．本書の執筆、編集作業は、太田が行なった。

6．測量作業は、株式会社アコード（ＭＩＮ05－３）、株式会社航空撮影センター大阪支店（ＭＩＮ05－４）に委託して行った。

7．発掘調査及び内業整理については下記の方々の参加を得た。（敬称略、順不同）
荒田恵、池田和江、大西美智子、周藤光代、谷口夫抄子、平野京美、平松由紀、牟田口京子、山田直子

8．本書に掲載した遺構写真の撮影は調査担当者が行い、遺物の写真は小林和美が行った。

9．本書で報告した記録類及び出土遺物は、河内長野市教育委員会が保管している。広く一般の方々に活用されることを望む。

凡　　例

1．調査は、国土座標Ⅵ系の座標軸に依拠している。また、本書で用いる北は座標北を示している。レベル高はＴＰを使用している。

2．本書で使用した土層及び遺物の色調は、『新版標準土色帖』（2003年版）による。

3．本書の遺構名は下記の略記号を用いた。

ＳＢ…掘立柱建物　ＳＤ…溝　ＳＩ…竪穴住居　ＳＫ…土坑　ＳＰ…ピット

Ｐ…柱穴（ＳＢを構成するピット）　ＳＸ…落ち込み

4．遺構実測図の縮尺は、1/10・1/50・1/60・1/80・1/100・1/200である。

5．遺物実測図の縮尺は、土器1/4・石器1/2とした。

6．弥生土器・土師器・土師質土器の断面は白抜き、須恵器・瓦器・瓦質土器・陶磁器の断面は黒塗り、瓦の断面は斜線である。

7．遺物番号と写真図版の番号は一致する。

8．文中の須恵器の編年は田辺編年、瓦器埦の型式分類は尾上実氏の編年に基づくものである。

目　　次

序　文
例　言
凡　例
目　次
挿図目次
表目次
図版目次
第１章　はじめに……1
　第１節　位置と環境……1
　第２節　調査の経緯と経過……1
第２章　調査の結果……5
第１節　ＭＩＮ05－３調査区……5
第２節　ＭＩＮ05－４調査区……9
第３章　まとめ……16

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図……1
第２図　河内長野市遺跡分布図（1/40000）……2
第３図　ＭＩＮ05－３・ＭＩＮ05－４調査区位置図（1/2500）……4
第４図　ＭＩＮ05－３調査区平面図（1/100）……6
第５図　ＭＩＮ05－３調査区土層断面図（1/60）……7
第６図　ＭＩＮ05－３遺構実測図（1/80・1/50）……7
第７図　ＭＩＮ05－３出土遺物実測図（1/4・1/2）……8
第８図　ＭＩＮ05－４調査区平面図（1/100）……10
第９図　ＭＩＮ05－４調査区土層断面図（1/60）……11
第10図　ＭＩＮ05－４調査区遺構実測図（1/20）……12
第11図　ＭＩＮ05－４調査区出土遺物実測図（１）（1/4）……13
第12図　ＭＩＮ05－４調査区出土遺物実測図（２）（1/4）……15
第13図　三日市宿復原図（明治13年三日市村絵図に聞取の上作成）……17
第14図　三日市北遺跡遺構配置図……19・20

表　目　次

第１表　河内長野市内遺跡地名表……3

図　版　目　次

図版１　ＭＩＮ05－３　調査区検出状況（南から）、調査区完掘状況（南から）
図版２　ＭＩＮ05－３　調査区全景その１（上から）、調査区全景その２（上から）
図版３　ＭＩＮ05－３　ＮＶ１土層断面その１、ＮＶ１土層断面その２
図版４　ＭＩＮ05－４　調査区完掘状況その１(西から)、調査区完掘状況その２(西から)
図版５　ＭＩＮ05－４　調査区全景その１（上から）、調査区全景その２（上から）
図版６　遺物　ＭＩＮ05－３・４
図版７　遺物　ＭＩＮ05－４
図版８　遺物　ＭＩＮ05－４
図版９　遺物　ＭＩＮ05－４

第１章　はじめに

第１節　位置と環境

三日市北遺跡は河内長野市三日市町に所在する。地理的環境としては金剛・葛城山系を水源とする天見川と石見川が合流する地点の東岸北側、標高約130～140ｍにかけて位置する。河川に近い場所であるが沖積地はあまり見られず、基本的に低位段丘から中位段丘上に立地し、東側には金剛山地から派生した標高約200ｍの丘陵が迫っている。

第１図　遺跡位置図

歴史的環境としては当遺跡に南接して石見川の対岸には旧石器時代から近世にかけての複合遺跡である三日市遺跡が広がる。三日市遺跡は主な遺構としては、古墳時代中期の小型方墳や竪穴住居と掘立柱建物、古墳時代後期の横穴式石室をもつ古墳、中世の集落跡、近世の墓地や寺院跡・瓦窯などが検出されており各時代とも非常に内容が充実している。

また東側に迫る丘陵上には弥生時代後期の集落遺跡である大師山遺跡が広がり、大師山遺跡の西端には大師山古墳が立地する。大師山古墳は古墳時代前期に出現する全長50ｍの前方後円墳であり、内行花文鏡、管玉や鍬形石、車輪石などの石製品、刀子や鉄剣などの鉄製品、埴輪などが出土し、当地域の地域首長墓と考えられている。

北側に位置する烏帽子形山には古墳時代後期の烏帽子形古墳や文明12年（1480）に建立された烏帽子形八幡神社、また中世の山城として著名な烏帽子形城跡がある。烏帽子形城跡は文献にもしばしば登場するが、現在でも本丸跡や曲輪跡、土塁などの遺構がよく残っており、発掘調査においても主郭に相当する地点で礎石建物が検出されている。

三日市北遺跡の中央部には南北に高野街道が走り、三日市町駅周辺には宿場町として三日市宿が形成されていた。三日市宿跡の発掘調査においては多くの陶磁器とともに近世の建物跡や暗渠が検出されており、現存する建物とあわせて当時の宿場町の様子を彷彿とさせる。

このように三日市北遺跡周辺は当市域において遺跡が最も密集しており、綿々と人々の生活の営みが続けられてきたことがうかがえ、当市域の歴史を語る上で欠くことのできない地域である。

第２節　調査の経緯と経過

当該発掘調査は、河内長野市（担当、三日市町駅前再開発事務局（当時））を事業主体

第２図　河内長野市遺跡分布図（1/40000）

番号	文化財名称	種類	時代
1	長野神社遺跡	社寺	室町以降
2	河合寺遺跡	社寺	平安以降
3	観心寺遺跡	社寺	平安以降
4	大師山古墳	古墳	古墳（前期）
5	大師山南古墳	古墳？	古墳（後期）
6	大師山遺跡	集落・生産	弥生（後期）・平安
7	興禅寺遺跡	社寺	中世以降
8	烏帽子形八幡神社遺跡	社寺	室町以降
9	塚穴古墳	古墳・墳墓	古墳（後期）・近世
10	長池窯跡群	生産	平安～近世
11	小山田1号古墓	墳墓	奈良
12	小山田2号古墓	墳墓	奈良
13	延命寺遺跡	社寺	平安以降
14	天野山金剛寺遺跡	社寺・墳墓	平安以降
15	日野観音寺遺跡	社寺・生産	縄文・平安～近世
16	地蔵寺遺跡	社寺	中世以降
(17)	岩湧寺遺跡	社寺	平安以降
18	五ノ木古墳	古墳	古墳（後期）
19	高向遺跡	集落	旧石器～中世
20	烏帽子形城跡	城館・生産	中世～近世
21	喜多町遺跡	集落	縄文・古墳～中世
22	烏帽子形古墳	古墳	古墳（後期）
23	末広窯跡	生産	中世
24	塩谷遺跡	散布地	縄文～近世
25	流谷八幡神社	社寺	平安以降
26	蟹井淵南遺跡	散布地	中世
27	蟹井淵北遺跡	散布地	中世
28	天見駅北方遺跡	散布地	中世
29	千早口駅南遺跡	社寺	中世
30	岩瀬薬師寺遺跡	社寺	中世以降
31	清水遺跡	散布地	中世
32	伝「仲哀廟」古墳	古墳？	
(33)	堂村地蔵堂跡	社寺	近世
(34)	滝畑埋墓	墳墓	近世
(35)	中村阿弥陀堂跡	社寺	近世
(36)	東の村観音堂跡	社寺	近世
(37)	西の村観音堂跡	社寺	近世
38	清水阿弥陀堂跡	社寺	近世
39	滝尻弥勒堂跡	社寺	近世
(40)	宮の下内墓	墳墓	古墳
41	宮山古墳	古墳	古墳
42	宮山遺跡	集落	縄文・奈良
43	西代藩陣屋跡	散布地・城跡	飛鳥～奈良・江戸
44	上原町墓地	墳墓	近世
45	惣持寺跡	散布地・社寺	縄文・奈良・鎌倉
46	栗山遺跡	祭祀	中世～近世
47	寺ヶ池遺跡	散布地	縄文
48	上原遺跡	散布地	旧石器～近世
49	住吉神社遺跡	社寺	近世以降
50	高向神社遺跡	社寺	中世以降
51	青が原神社遺跡	社寺	中世以降
52	膳所藩代官所跡	城館	江戸
53	双子塚古墳跡	古墳	古墳
54	菱子尻遺跡	散布地・社寺	縄文～近世
55	河合寺城跡	城館	中世
56	三日市遺跡	集落・古墳他	旧石器～近世
57	日の谷城跡	城館	中世
58	高木遺跡	散布地	縄文
59	汐の山城跡	城館	中世
60	峰山城跡	城館	中世
61	稲荷山城跡	城館	中世
62	国見城跡	城館	中世
63	旗蔵城跡	城館	中世
64	権現城跡	城館	中世
(65)	天神社遺跡	社寺	中世以降
(66)	葛城第15経塚	経塚	平安以降
67	加賀田神社遺跡	社寺	中世以降
68	庚申堂遺跡	社寺	近世以降
69	石仏城跡	城館	中世
70	佐近城跡	城館	中世
71	旗尾城跡	城館	中世
72	葛城第16経塚	経塚	平安以降
(73)	葛城第18経塚	経塚	平安以降
(74)	葛城第19経塚	経塚	平安以降

番号	文化財名称	種類	時代
(75)	笹尾塞	城館	中世
(76)	大沢塞	城館	中世
(77)	三国山経塚	経塚	平安以降
(78)	光滝寺遺跡	社寺	中世以降
(79)	猿子城跡	城館	中世
80	蟹井淵神社遺跡	社寺	中世以降
81	川上神社遺跡	社寺	中世以降
82	千代田神社遺跡	社寺	中世以降
83	向野遺跡	集落・生産	縄文・平安～近世
84	古野町遺跡	散布地	中世
85	上原北遺跡	集落	中世
86	大日寺遺跡	社寺・古墳・墳墓	弥生～近世
87	高向南遺跡	散布地	鎌倉
88	小塩遺跡	集落	縄文～奈良
89	加塩遺跡	集落	古墳（後期）
90	尾崎遺跡	集落	古墳～中世
91	ジョウノマエ遺跡	城館？	中世
92	仁王山城跡	城館	中世
93	タコラ城跡	城館	中世
94	岩立城跡	城館	中世
95	上原近世瓦窯	生産	近世
96	市町東遺跡	散布地	弥生・中世
97	上田町窯跡	生産	近世
98	尾崎北遺跡	集落	古墳～中世
99	西之山町遺跡	散布地	中世
100	野間里遺跡	集落	平安
101	鳴尾遺跡	散布地	中世
102	上田町遺跡	散布地	古墳・中世
103	上原中遺跡	散布地	古墳・中世
104	小野塚遺跡	墳墓	中世
(105)	葛城第17経塚	経塚	平安以降
106	薬師堂跡	社寺	中世以降
107	野作遺跡	生産	中世
108	寺元遺跡	集落・社寺	縄文・奈良・中世
(109)	鳩原遺跡	散布地	中世
110	法師塚古墳跡	古墳	古墳
111	山上講山古墳跡	古墳	古墳
112	西浦遺跡	集落	古墳・中世・近世
113	地福寺跡	社寺	近世
114	宮の下遺跡	集落	平安～中世
115	栄町遺跡	散布地	弥生・古墳・中世
116	錦町遺跡	散布地	中世
(117)	太井遺跡	散布地	縄文・中世
118	錦町北遺跡	集落	弥生・中世・近世
119	市町西遺跡	集落	縄文・中世
120	栄町南遺跡	集落	中世
121	栄町東遺跡	散布地	弥生・中世
122	楠町東遺跡	散布地	弥生
123	汐の宮町南遺跡	散布地	弥生・奈良
124	汐の宮町遺跡	散布地	中世
125	神ガ丘近世墓	墳墓	近世
126	増福寺	社寺	中世以降
127	三味城遺跡	墳墓・城跡	中世・近世
128	松林寺遺跡	社寺	近世以降
129	昭栄町遺跡	散布地	中世
*130	東高野街道	街道	平安以降
*131	西高野街道	街道	平安以降
*132	高野街道	街道	平安以降
133	上原東遺跡	散布地	弥生・中世・近世
134	地蔵寺東方遺跡	墳墓	弥生・鎌倉
135	本多町北遺跡	散布地	中世
136	下里町遺跡	散布地	古墳・中世
137	あかしあ台遺跡	散布地	近世
138	岩瀬北遺跡	集落	中世
139	岩瀬近世墓地	墳墓	近世
140	昭栄町東遺跡	散布地・池跡	縄文・中世・近世
141	三日市北遺跡	集落	縄文・弥生～中世
142	三日市宿跡	宿駅に伴う街並	中世～近世
143	上田町宿跡	宿駅に伴う街並	中世～近世
144	滝尻遺跡	散布地	縄文・古代・中世
145	市町北遺跡	散布地	中世
146	太白遺跡	散布地	中世
147	高向神社南遺跡	集落	古墳
148	塚遺跡	散布地	弥生・古墳・中世

（　）は地図範囲外　*は街道につき地図上にはプロットせず

第1表　河内長野市内遺跡地名表

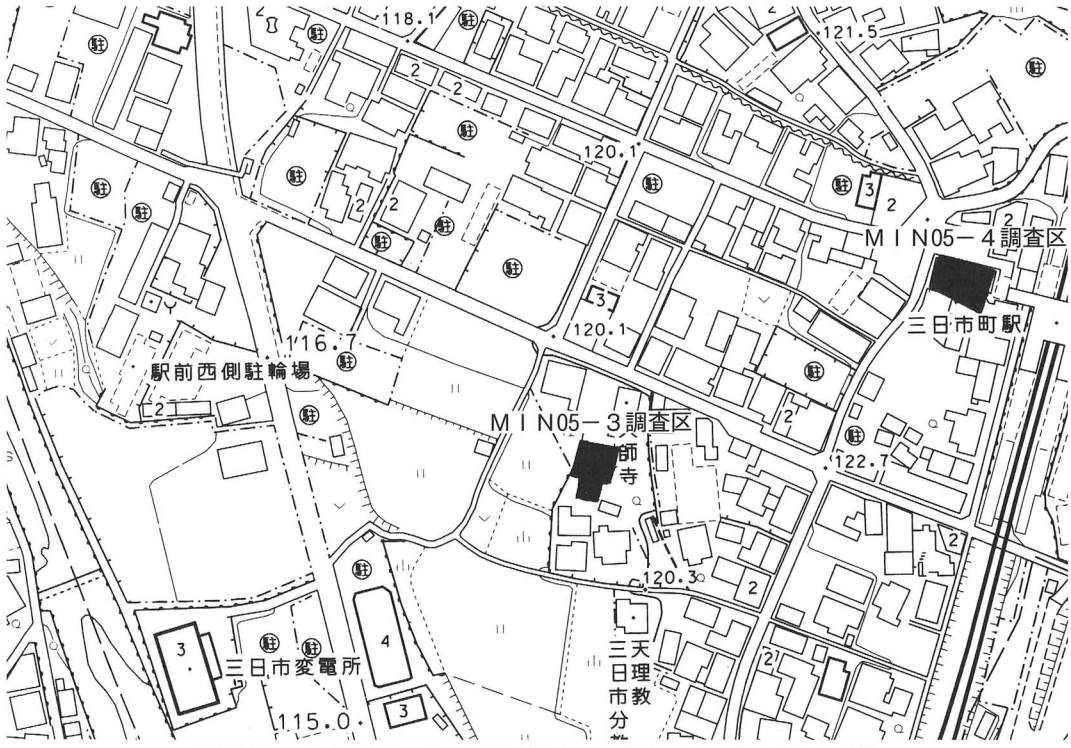
とする三日市町駅前再開発事業、三日市町駅周辺整備事業（以下「事業」という）に伴う事前調査である。

平成11年度に、河内長野市三日市町駅前再開発事務局（以下、「市」という）より、河内長野市教育委員会（以下「市教委」という。）へ事業地内の埋蔵文化財の取扱いについて照会があった。

この際、事業地が周知の埋蔵文化財包蔵地である高野街道・三日市北遺跡の範囲に該当するため、この場所については、発掘調査を実施する必要があることを伝えた。また、文化財保護法第57条の３の発掘通知を市教委へ提出することを求めた。

この後、平成12年11月１日付けで、市から発掘通知の提出があり、市教委では、同年11月６日付けで、大阪府教育委員会へ進達を行った。この後、大阪府教育委員会から工事施行前に発掘調査を実施するようにとの指導があり、この指導に基づき、市教委では、発掘調査依頼書を市教委の外郭団体である河内長野市遺跡調査会（以下調査会という）へ提出することを求めた。

その後、市教委へ発掘調査依頼書の提出があり、市教委の指導の下、市は調査会との契約書の締結を行なった。この後、平成12年度から平成16年度にかけて遺跡調査会による発掘調査を行が行なわれ、平成17年度については調査会の解散に伴ない市教委が調査を行なった。この間の調査記録としては、すでに『三日市北遺跡Ⅰ』『三日市北遺跡Ⅱ』として平成18年３月に刊行しているが、平成17年度に行った調査区の一部については、未報告のままであった。本報告書は、これまで未報告のままであった平成17年度の調査について報告している。



第３図　ＭＩＮ05－３・ＭＩＮ05－４調査区位置図（1/2500）

第２章　調査の結果

第１節　ＭＩＮ05－３調査区

当該調査区は、三日市北遺跡の中央部に位置しており、長辺18m、短辺13mに設定した。調査の方法は近代の盛土、旧耕土、旧床土を機械掘削し、中近世及び古墳時代の遺物包含層を人力掘削した。遺構は地山上面で検出した。

基本層序は地表面から深さ0.2mまでが灰色系の粗砂層（旧耕土）、0.2m～0.3mまでが黄褐色系粗砂層（旧床土）、0.3～0.5mまでが褐灰色系シルト層（堆積土）の順で堆積していた。

（１）土坑

［ＳＫ１］

調査区の北西部で検出された。検出面の標高は120.00～120.20mである。規模は長さ5.8m、幅4.2m、深さ0.16mを測る。検出方向はＮ－77°－Ｗであり、平面形は、不正形であった。埋土は、上層から、10YR6/4にぶい黄褐シルト層、10YR6/4にぶい黄褐粘土層であった。

遺物は弥生土器の甕（４）が出土している。大型の甕であり「く」の字状に屈曲する口縁部を持ち、口縁端部は上下方向に拡張している。外面は、たて方向のハケ、内面は斜め方向のハケによって仕上げている。

［ＳＫ２］

調査区の北東部で包含層中に検出された。検出面の標高は120.50～120.40mである。規模は長さ1.6m、幅0.75m、深さ0.5mを測る。検出方向はＮ－10°－Ｅであり、平面形は、楕円形であった。埋土は、2.5GY6/1オリーブ灰レキまじり細砂層、5GY5/1オリーブ灰シルトまじり粘土層であった。

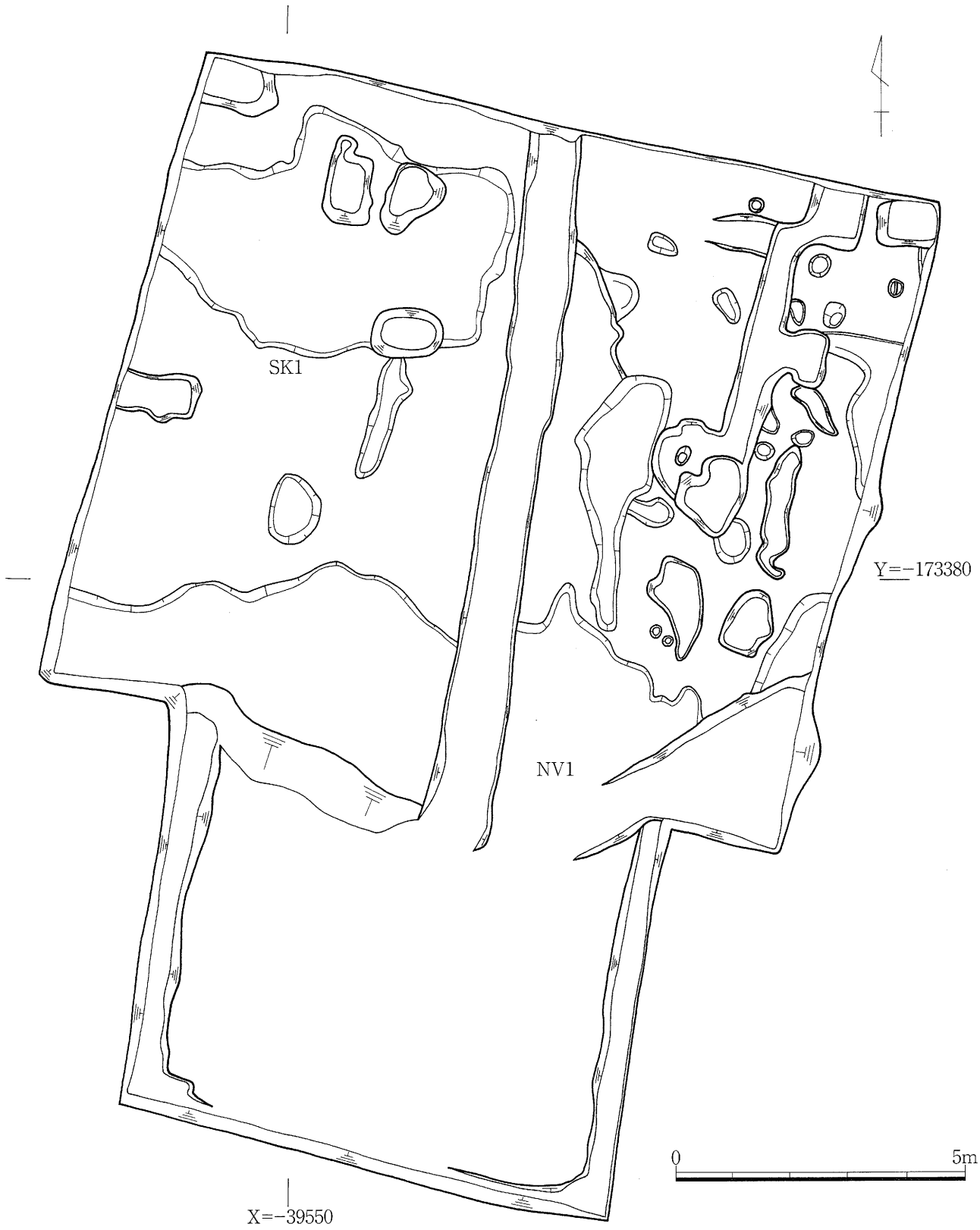
遺物は出土しなかった。

（２）落ち込み

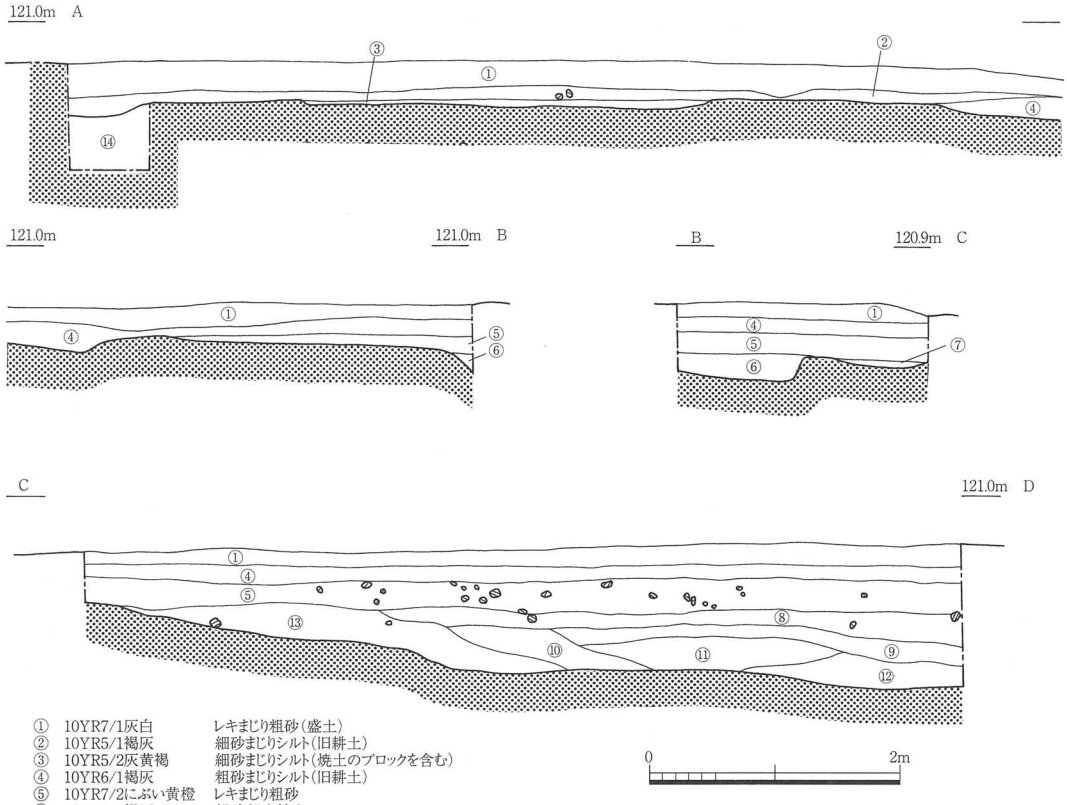
［ＮＶ１］

調査区の南側で検出された。検出面の標高は120.14mである。幅13mにわたって検出した。南方向に向かって傾斜している。落ち込み肩部からもっとも深い部分までの比高差は１mである。

遺物は弥生土器の短頸壺（５）、須恵器の杯蓋（６・７・８）、土師皿（９）、瓦質皿（11）が出土した。短頸壺は、口縁部に凹線が施文されており、内外面ともにミガキによって仕

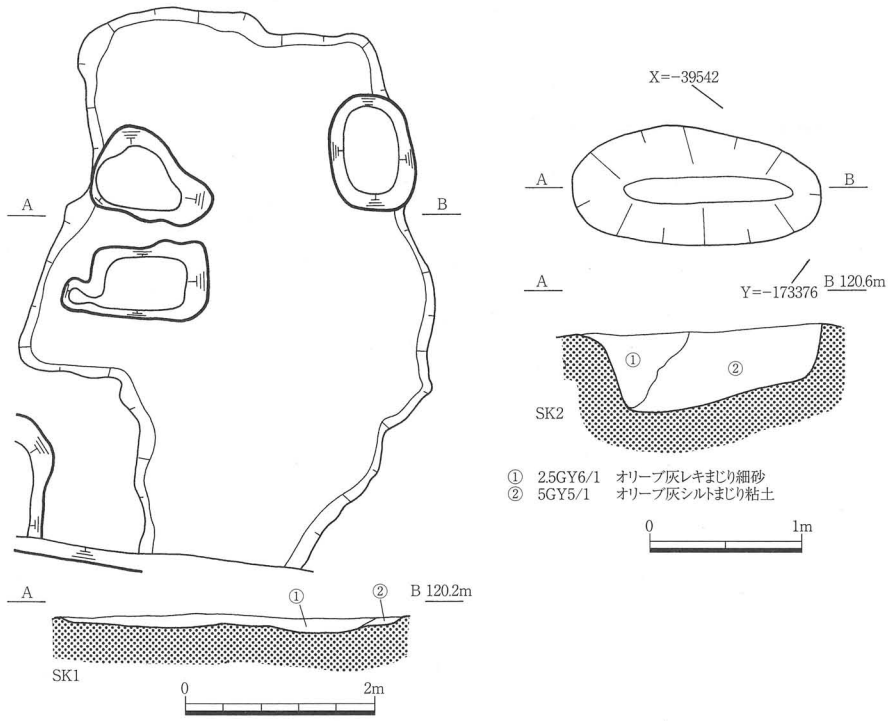


第４図　ＭＩＮ05－３調査区平面図（1/100）



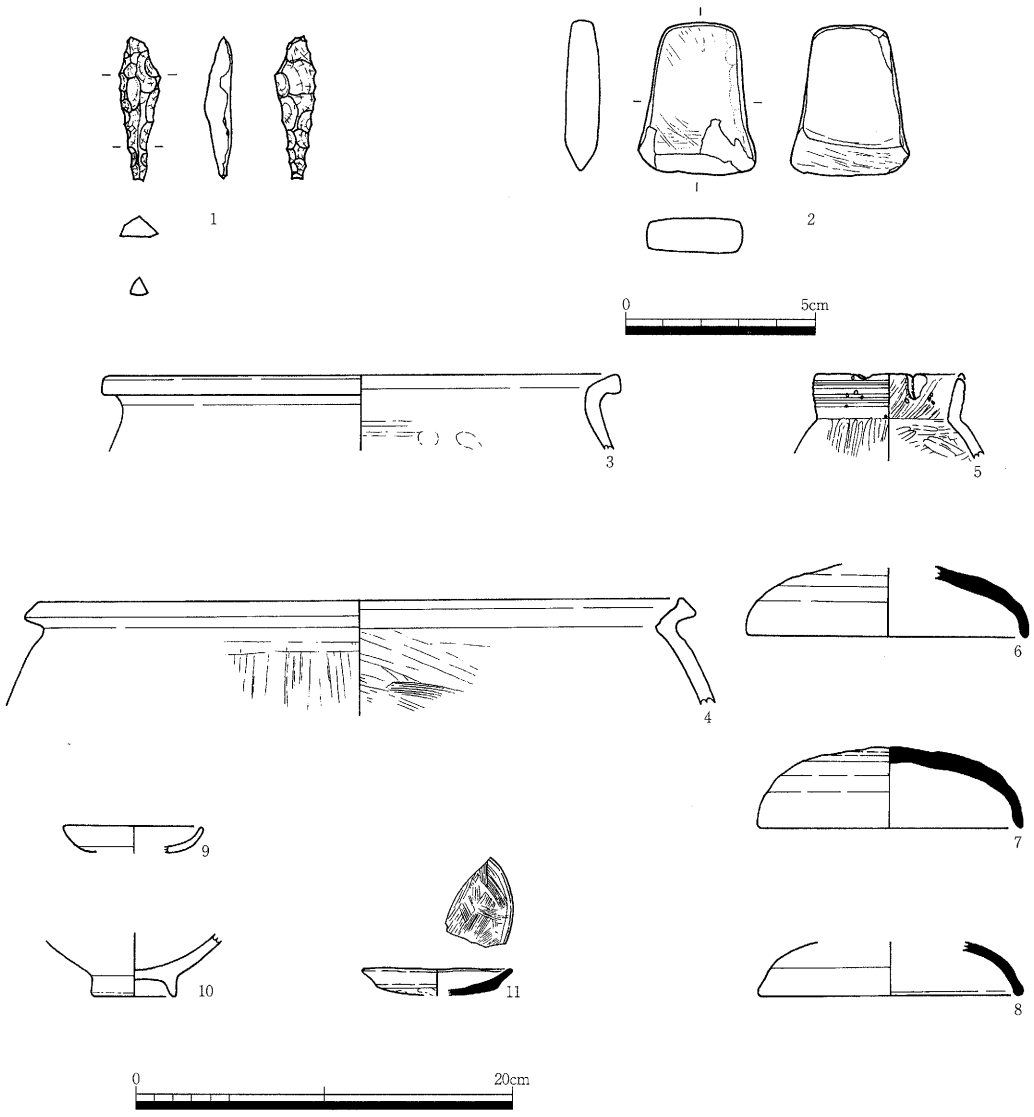
① 10YR7/1灰白 レキまじり粗砂(盛土)
② 10YR5/1褐灰 細砂まじりシルト(旧耕土)
③ 10YR5/2灰黄褐 細砂まじりシルト(焼土のブロックを含む)
④ 10YR6/1褐灰 粗砂まじりシルト(旧耕土)
⑤ 10YR7/2にぶい黄橙 レキまじり粗砂
⑥ 10YR6/1褐灰 粗砂まじり粘土
⑦ 10YR6/1褐灰 粗砂まじり粘土
⑧ 10YR4/2灰黄褐 細砂まじり粘土(中世～弥生時代の遺物を含む)
⑨ 10YR4/1褐灰 細砂まじり粘土(中世～弥生時代の遺物を含む)
⑩ 7.5Y4/1灰 シルトまじり粘土(中世～弥生時代の遺物を含む)
⑪ 2.5Y4/1黄灰 シルトまじり粘土(中世～弥生時代の遺物を含む)
⑫ 10YR3/1黒褐 シルトまじり粘土(中世～弥生時代の遺物を含む)
⑬ 10YR3/1黒褐 シルトまじり粘土(中世～弥生時代の遺物を含む)
⑭ 2.5GY6/1オリーブ灰 レキまじり粗砂

第５図　ＭＩＮ05－３調査区土層断面図（1/60）



① 2.5GY6/1 オリーブ灰レキまじり細砂
② 5GY5/1 オリーブ灰シルトまじり粘土
① 10YR6/4 にぶい黄褐シルト
② 10YR6/4 にぶい黄褐粘土

第６図　ＭＩＮ05－３遺構実測図（1/80・1/50）



第７図　ＭＩＮ05－３出土遺物実測図（1/4・1/2）

上げている。須恵器杯蓋は、６・７がTK43型式、８がTK209型式に相当する。９は土師皿の細片である。11は、瓦質皿の細片で15世紀後半のものです。

（３）遺物包含層

遺物包含層からは、弥生土器の甕（３）、サヌカイト製の石錐（１）、緑泥片岩製磨製石斧（２）、磁器の碗（10）が出土した。

第２節　ＭＩＮ05－４調査区

調査区は長辺16m、短辺11mで設定した。調査の方法は近代の盛土、旧耕土、旧床土を機械掘削し、近世の遺物包含層を人力掘削した。遺構面は地山上面で検出した。

基本層序は地表面から深さ0.25mまでは10YR5/2灰黄褐色粗砂まじり細砂～シルト（盛土）、0.25m～0.5mまでは10YR7/3にぶい黄橙色細砂まじり微砂～シルト（堆積土）の順で堆積していた。

（１）土坑

［ＳＫ１］

調査区の南西部で検出された。検出面の標高は123.64mである。平面形は楕円形を呈し、検出方向はＮ－67°－Ｗであった。規模は長軸1.5m、短軸0.7m、深さ0.3mであった。埋土は、10YR5/2灰黄褐色微砂～シルトであった。

遺物は染付けの碗（１・２・３・14・15）、染付けの広東碗（４）が出土した。

［ＳＫ２］

調査区の西部で検出された。検出面の標高は123.66mである。平面形は隅丸方形を呈し、規模は一辺0.6mで深さ0.25mであった。埋土は、上層から、10YR6/2褐灰色微砂～シルト、2.5Y6/3にぶい黄色微砂～シルトであった。

遺物は染付けの碗（９）、白磁（18）、堺擂鉢（16）が出土した。

［ＳＫ３］

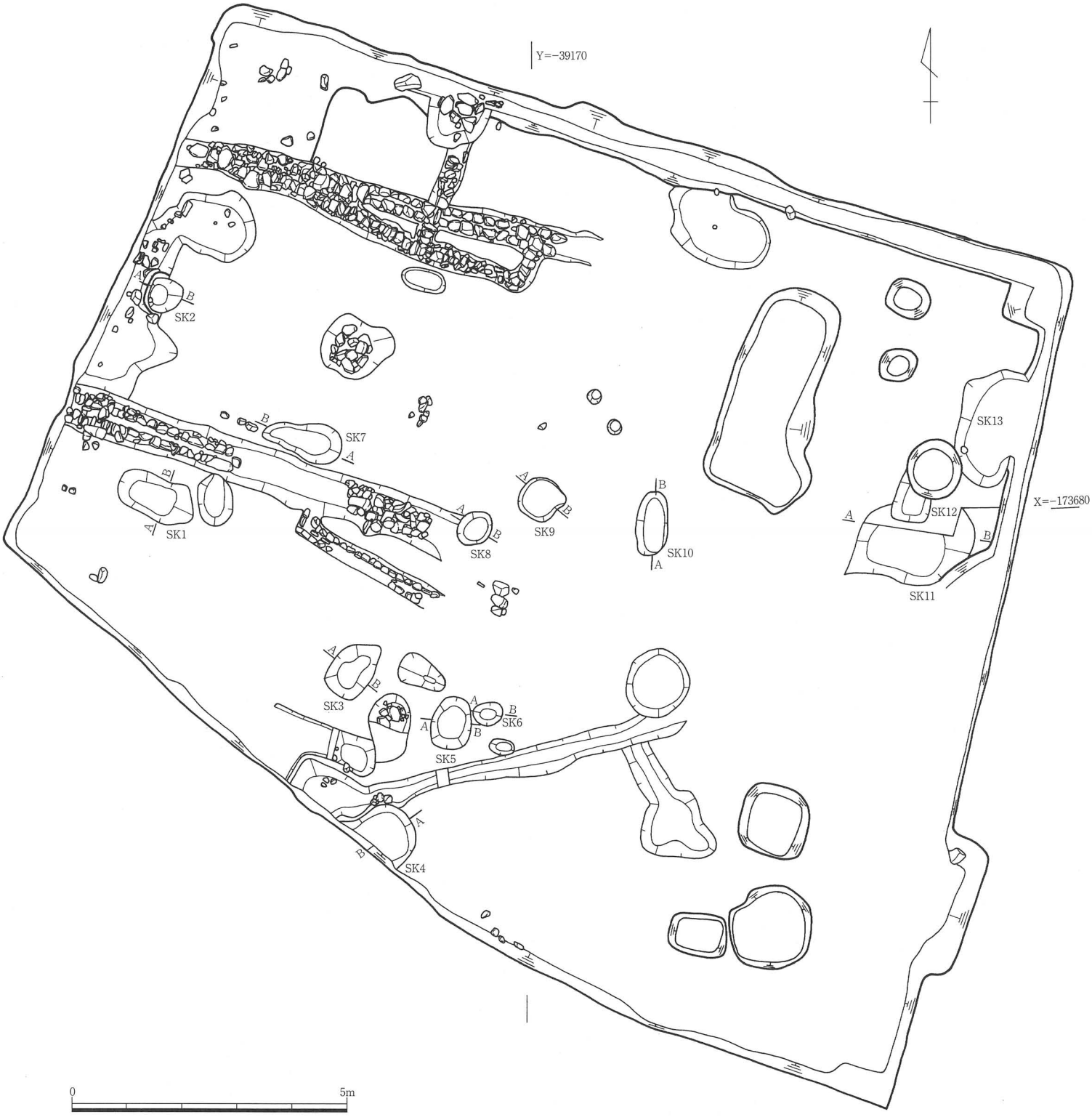
調査区の南部で検出された。検出面の標高は123.63mである。平面形は楕円形を呈し、検出方向はＮ－32°－Ｅであった。規模は長軸1.2m、短軸0.7m、深さ0.12mであった。埋土は、上層から、10YR5/1褐灰色細砂まじりシルト（10YR8/6黄橙色粘土のブロックを含む）、10YR6/6明黄褐色細砂であった。

遺物は出土しなかった。

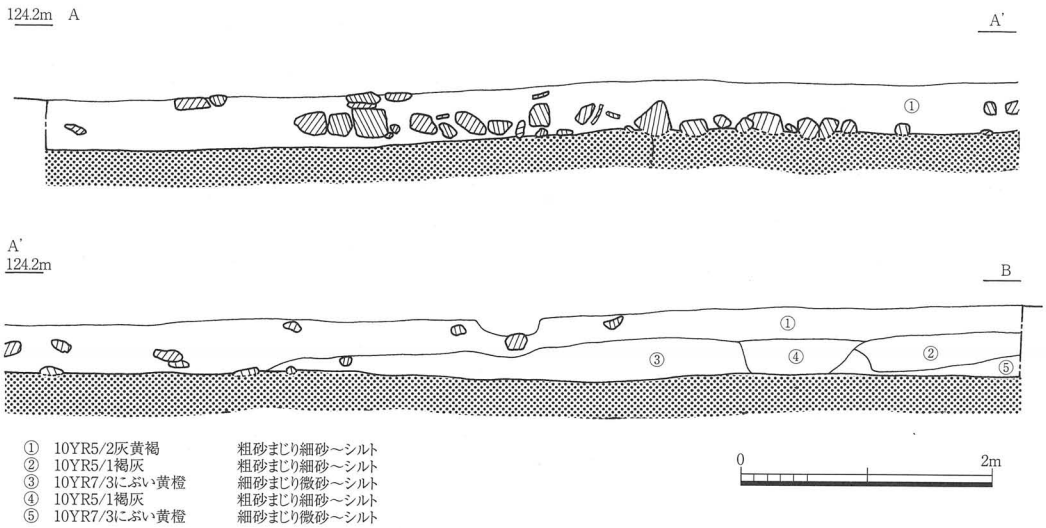
［ＳＫ４］

調査区の南部で検出された。検出面の標高は123.56～123.65mである。ＳＫ４は調査区外へ続いており、北半部のみ調査を行なった。平面形は円形を呈し、直径は1.2mであると考えられ、深さ0.27mであった。埋土は、10YR6/2灰黄褐色細砂～シルトであり、直径10～20cmのレキを多く含んでいた。

遺物は出土しなかった。



第８図　ＭＩＮ05－４調査区平面図（1/100）



第９図　ＭＩＮ05－４調査区土層断面図（1/60）

［ＳＫ５］

調査区の南部で検出された。検出面の標高は123.61～123.4mである。平面形は楕円形を呈し、検出方向はＮ－８°－Ｅであった。規模は長軸１m、短軸0.6m、深さ0.38mであった。埋土は、上層から、10YR6/4にぶい黄橙色粗砂まじりシルト、10YR5/1褐灰色粗砂まじりシルト、10YR6/6明黄褐色細砂、10YR6/6明黄褐色細砂であった。

遺物は出土しなかった。

［ＳＫ６］

調査区の南部で検出された。検出面の標高は123.63mである。平面形は円形を呈し、規模は直径0.5m、深さ0.1mであった。埋土は、上層から10YR5/1褐灰色細砂まじりシルト（10YR8/6黄橙色粘土のブロックを含む）、10YR6/4にぶい黄橙色レキまじり粗砂であった。

遺物は出土しなかった。

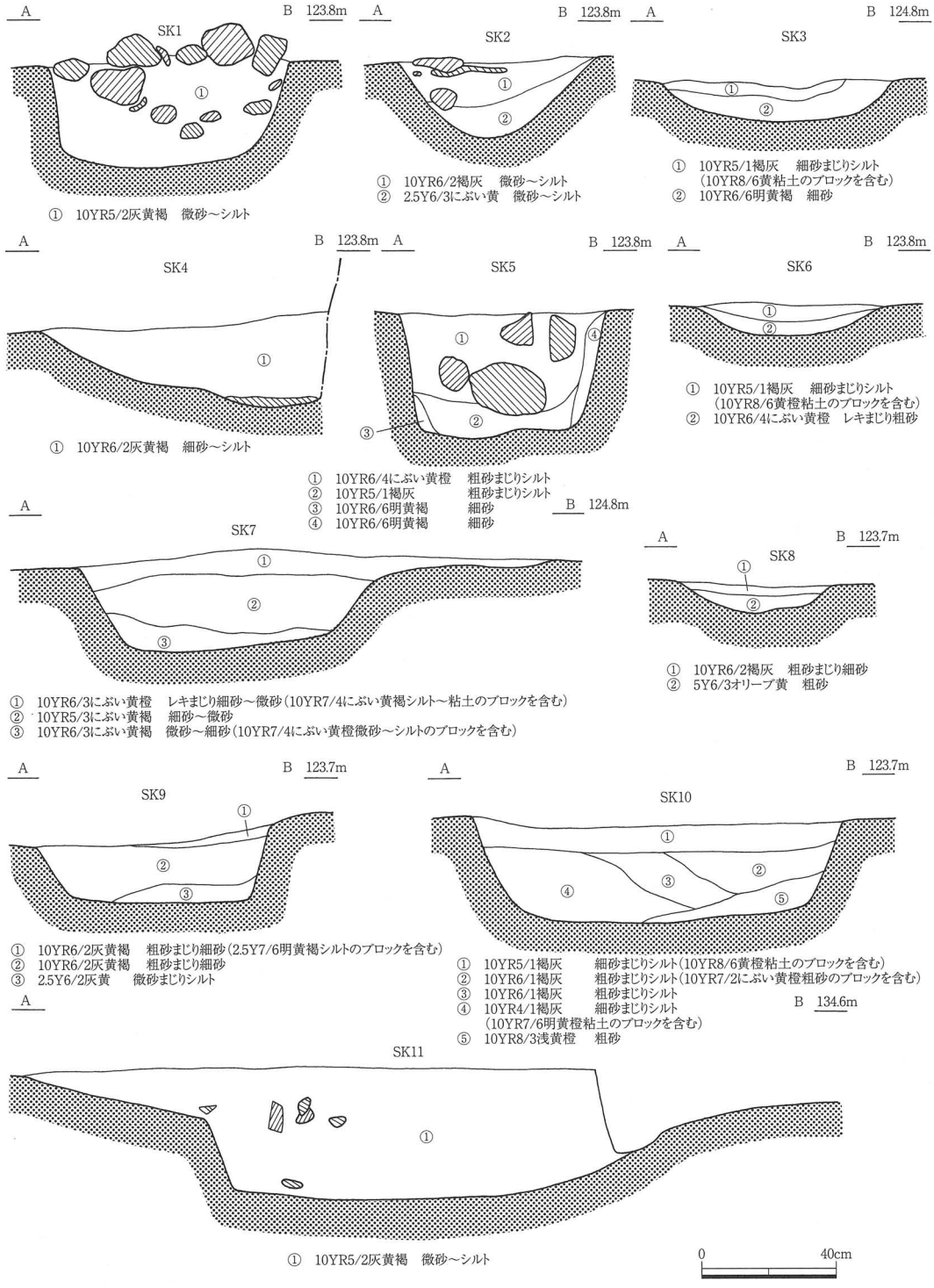
［ＳＫ７］

調査区の西部で検出された。検出面の標高は123.65mである。平面形は楕円形を呈し、検出方向はＮ－68°－Ｗであった。規模は長軸1.5m、短軸0.75m、深さ0.3mであった。埋土は、上層から、10YR6/3にぶい黄橙色レキまじり細砂～微砂（10YR7/4にぶい黄褐シルト～粘土のブロックを含む）、10YR5/3にぶい黄褐色細砂～微砂、10YR6/3にぶい黄褐微砂～細砂（10YR7/4にぶい黄褐微砂～シルトのブロックを含む）であった。

遺物は出土しなかった。

［ＳＫ８］

調査区の中央で検出された。検出面の標高は123.61mである。平面形は円形を呈し、規模は直径0.6m、深さ0.1mであった。埋土は、上層から、10YR6/2褐灰色粗砂まじり細砂、



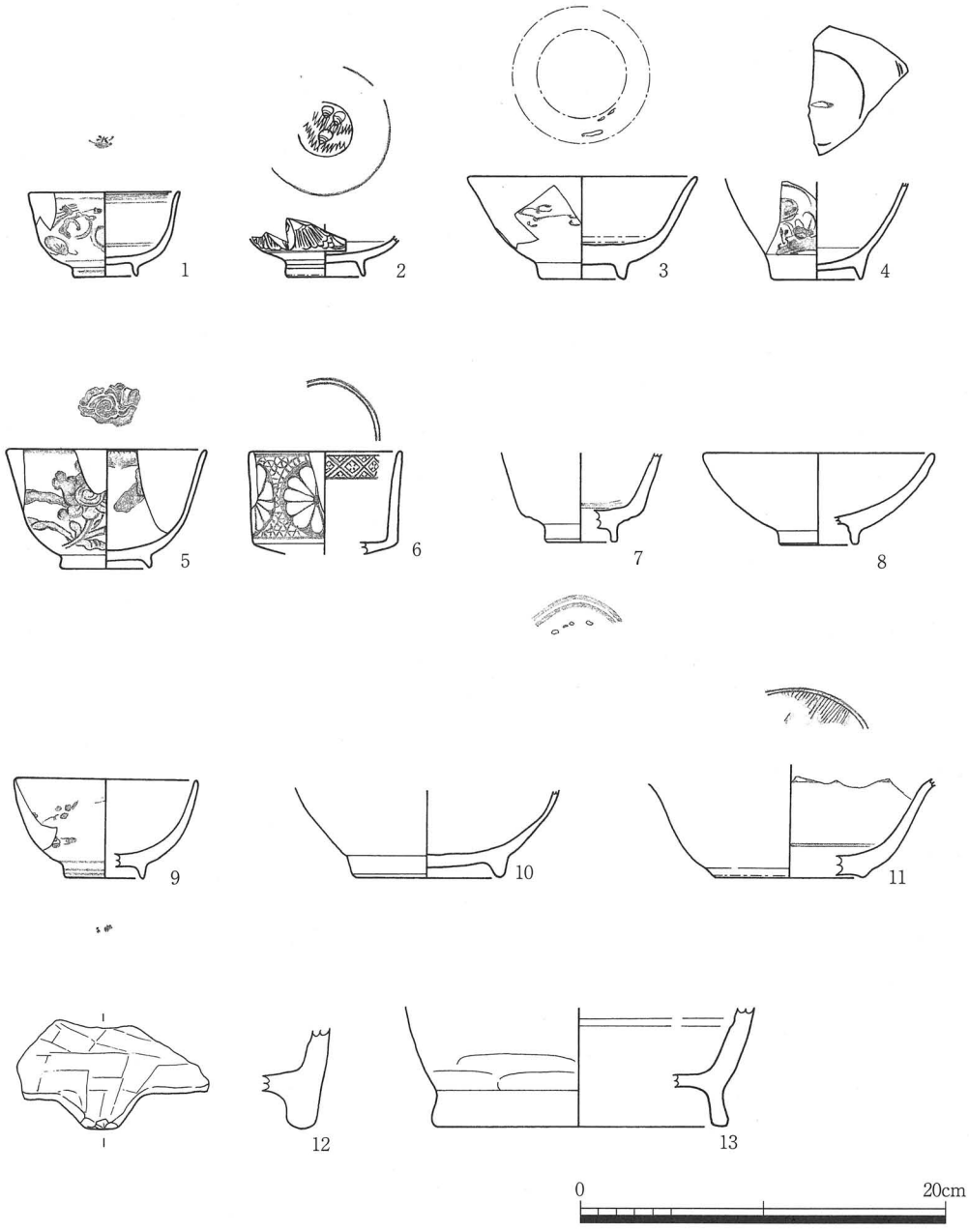
第10図　ＭＩＮ05－４調査区遺構実測図（1/20）

5Y6/3オリーブ黄色粗砂であった。

遺物は出土しなかった。

［ＳＫ９］

調査区の中央で検出された。検出面の標高は123.53～123.58mである。平面形は円形を



第11図　ＭＩＮ05－４調査区出土遺物実測図（１）(1/4)

呈し、規模は直径0.8m、深さ0.22mであった。埋土は、上層から、10YR6/2灰黄褐色粗砂まじり細砂（2.5Y7/6明黄褐色シルトのブロックを含む)、10YR6/2灰黄褐色粗砂まじり細砂、2.5Y6/2灰黄色微砂まじりシルトであった。

遺物は染付けの碗（５）が出土した。

［ＳＫ10］

調査区の中央で検出された。検出面の標高は123.60mである。平面形は隅丸長方形を呈し、検出方向はＮ－３°－Ｗであった。規模は長軸1.15m、短軸0.55m、深さ0.3mであった。埋土は、上層から、10YR5/1褐灰色細砂まじりシルト（10YR8/6黄橙色粘土のブロックを含む）、10YR6/1褐灰色粗砂まじりシルト（10YR7/2にぶい黄橙色粗砂のブロックを含む）、10YR6/1褐灰色粗砂まじりシルト、10YR4/1褐灰色細砂まじりシルト（10YR7/6明黄橙色粘土のブロックを含む）、10YR8/3浅黄橙色粗砂であった。

遺物は出土しなかった。

［ＳＫ11］

調査区の東部で検出された。検出面の標高は123.4～123.3mである。ＳＫ10は他の遺構によって破壊を受けている箇所が多く正確な形状は不明であるが、平面形は隅丸方形を呈し、規模は一辺２m、深さ0.4mであった。埋土は10YR5/2灰黄褐微砂～シルトであった。

遺物は染付けの碗（６・７）、青磁の碗（８）、土師質の火鉢（17）、皿（19）が出土した。

［ＳＫ12］

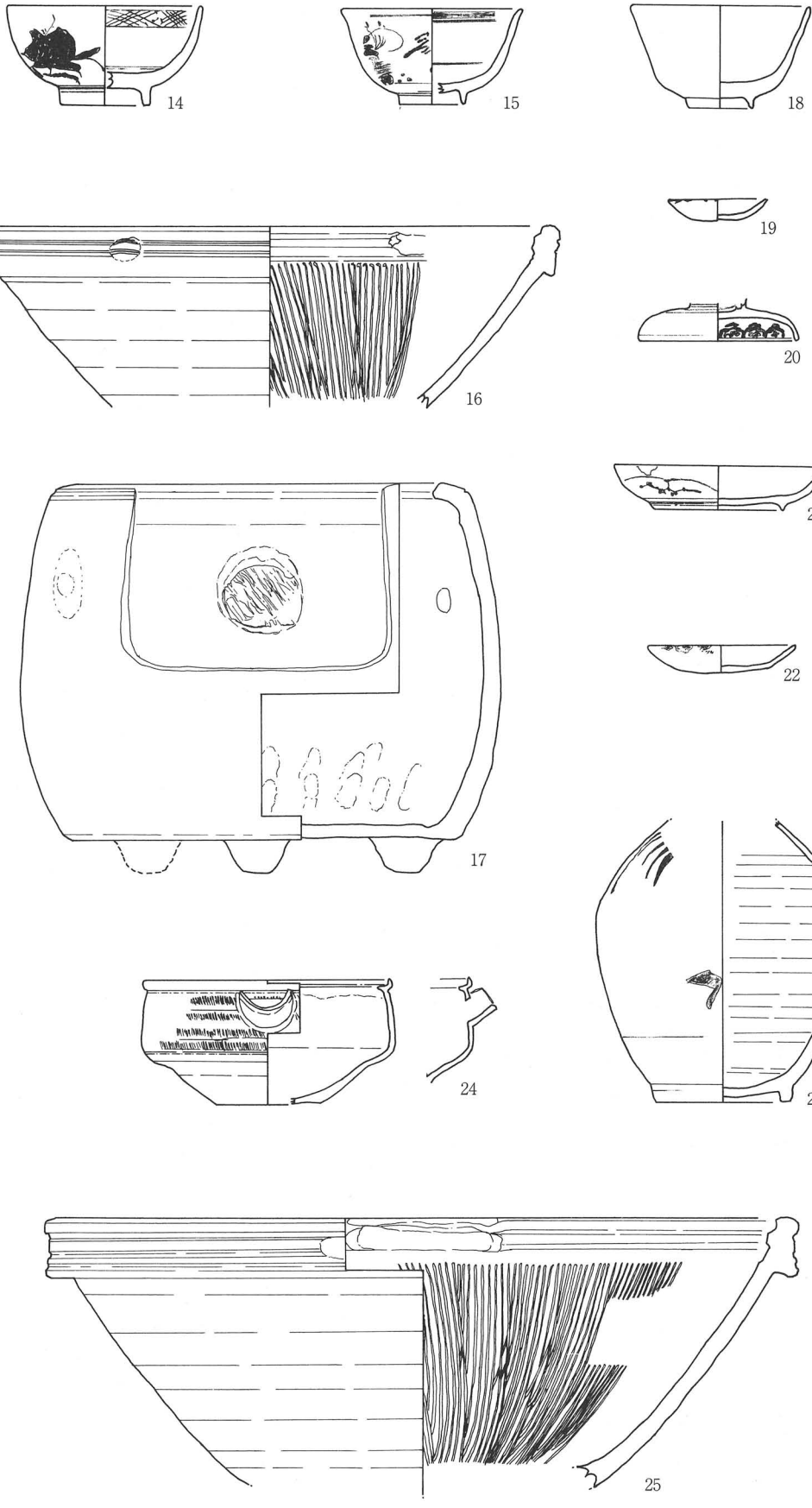
調査区の東部で検出された。検出面の標高は123.84～123.51mである。ＳＫ11を破壊してつくられており、攪乱によって一部が破壊されている。短径は、0.6m、長径は不明、深さは0.9mであった。埋土は、10YR6/2灰黄褐粗砂まじり細砂（2.5Y7/6明黄褐シルトのブロックを含む）であった。遺物は、染付けの碗蓋が（20）が出土している。

［ＳＫ13］

調査区の東部で検出された。検出面の標高は123.84～123.51mである。一部は調査区外へと続いていた。短径は、１m、長径は不明、深さは２m、深さは0.3mであった。埋土は、10YR6/2灰黄褐粗砂まじり細砂（2.5Y7/6明黄褐シルトのブロックを含む）であった。遺物は染付けの皿（21）が出土している。

（２）包含層

遺物包含層からは染付けの壺（23）、白磁碗（10）、染付けの碗（11）、火鉢（12・13）、土師皿（22）、関西系陶器の鍋（24）、堺擂鉢（25）が出土した。



第12図　ＭＩＮ05－４調査区出土遺物実測図（２）（1/4）

第３節　まとめ

今回調査の対象となっている三日市北遺跡・三日市宿跡は弥生時代中期と江戸時代の遺構・遺物が検出されている複合遺跡であり、平成12年度～平成17年度にかけて、三日市町駅前再開発事業に伴い発掘調査を行ってきた。この内、平成12年度～平成17年６月までに行なった発掘調査については、『三日市北遺跡Ⅰ』及び『三日市北遺跡Ⅱ』にて報告を行なっている。

今回報告の対象となったのは、平成17年７月以降に行なわれた発掘調査であり、今回の報告で、三日市町駅前再開発事業に伴って行われた三日市北遺跡・三日市宿跡の調査の報告は完結したことになる。

ＭＩＮ05－３調査区では、弥生時代～古墳時代の遺構・遺物、中世の遺物、近世・近代の遺構・遺物が検出されている。弥生時代の遺構・遺物に関して、調査区の南部で、南方向へ向かって傾斜する落ち込み（ＮＶ１）が検出されたことは、集落遺跡の範囲を考察する上で重要である。この落ち込みの南方150ｍには、石見川が流れており、南方50ｍには段丘崖が河川にそって形成されていることや、調査区において弥生時代の遺構が希薄であることを考えると、当該調査区付近が弥生時代集落遺跡の南限であった可能性が高い。

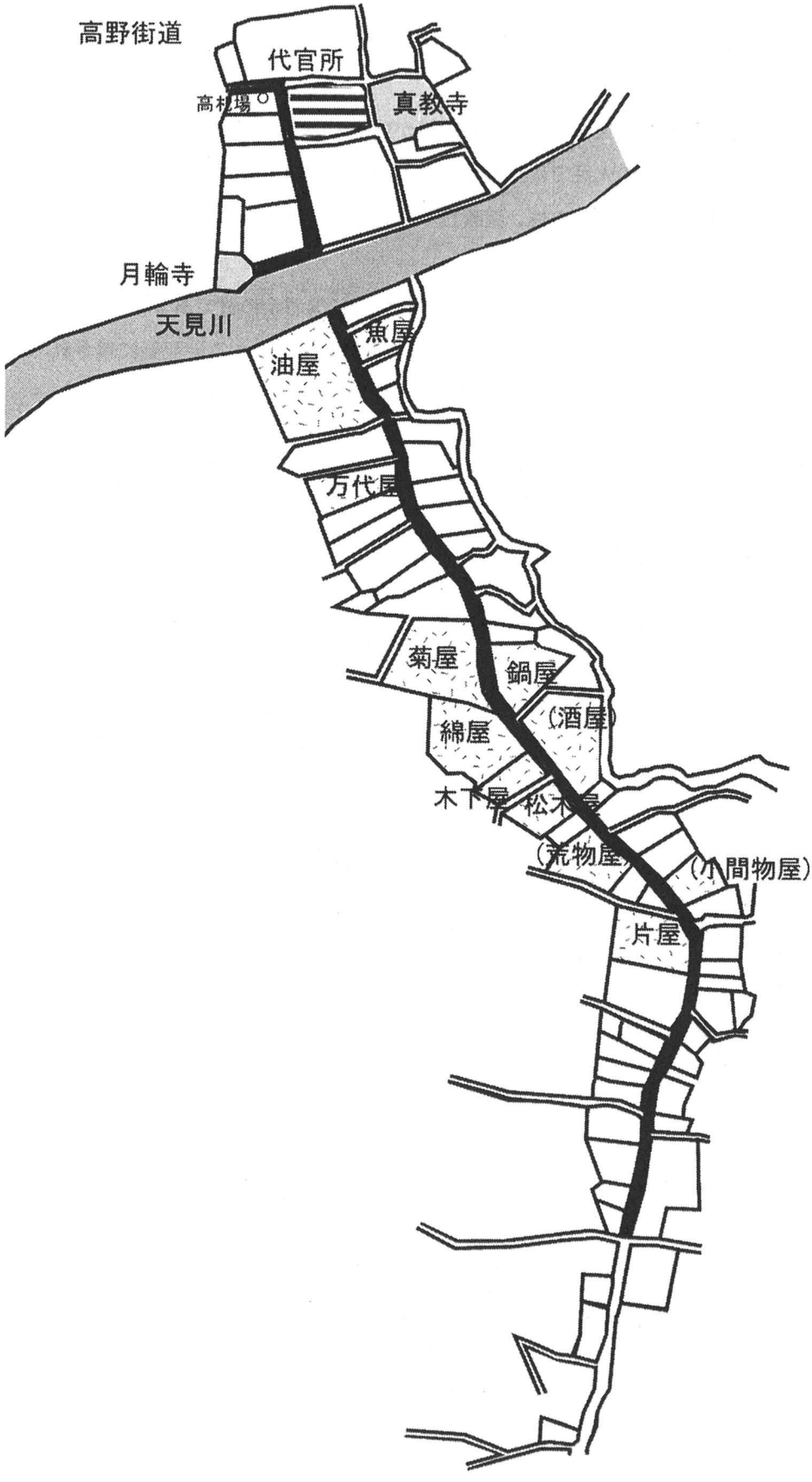
ＭＩＮ05－４調査区では、主に近世の遺構を検出している。三日市北遺跡の東端部には、高野街道が南北にとおっており、近世の宿場町である三日市宿があった場所である。

三日市宿跡からは、これまでの発掘調査において、明確な建物跡は、検出していないものの石組暗渠・桶埋納遺構などが検出されている。ＭＩＮ05－４調査区では、土坑と石組暗渠が検出されている。

高野街道は、高野山詣で使われたことから、このような名称がついたものである。高野街道は、東高野街道・西高野街道・下高野街道・中高野街道の４つの街道からなるが、堺の大少路を起点とする西高野街道は江戸時代に「高野道」と呼ばれ高野山詣の本道として幕府により管理され、また大阪・堺より紀州へいたる往来道として栄えた。このため、堺より七里、紀見峠宿まで二里の三日市村に三日市宿が置かれ、人馬の継立てが行なわれた。現在でも、宿場町の面影を残す民家や道標が残されている。

三日市という地名は、中世の三斎市を連想させるが、三の日に市が開かれたという史料や伝承はない。三日市宿がいつごろ設置されたのかについては明らかではないが、正徳元年（1711）の高札が残っているので、少なくとも18世紀前半には宿駅として機能していたことが分かる。三日市宿は「馬貸所三日市村」・「馬次宿馬」として史料に登場し、馬で荷物や人を運ぶ宿駅であり、常に二五人の人夫と25匹の馬を常備しておかなければならなかった。三日市宿を利用する人は、相当多数にのぼったものと推定できるが、公用で宿泊し、人馬継立を行なう場合、その出費は村の負担となっていた。

三日市宿では、本陣格の油屋を中心に多くの旅籠屋があったことが知られており、明和



第13図　三日市宿復原図（明治13年三日市村絵図に聞取の上作成）

８年（1771）の三日市村明細帳には、旅籠屋が23軒あったことが記載されている。この他、人足や通行人を対象に商売をする家があった。享保元年（1801）刊行の『河内名所図会』には、宿駅の繁栄ぶりが描かれている。

三日市宿は、数度の火災にみまわれた記録が残っている。元禄10年閏２月26日の火災では21軒、同年10月14日の火災では15軒が、宝永元年（1704）９月22日の火災では34軒が焼失した記録が残っている。この他、宝暦12年（1762）正月28日の火災では、宿馬の書類が焼失したことがわかっている。

三日市村は、幕府領219石余、膳所藩領84石余、計304石余の村であり、宿駅には、幕府領・膳所藩領の庄屋１名ずつのほか、両領で１人の駅役人がいたこが記録に残されている。

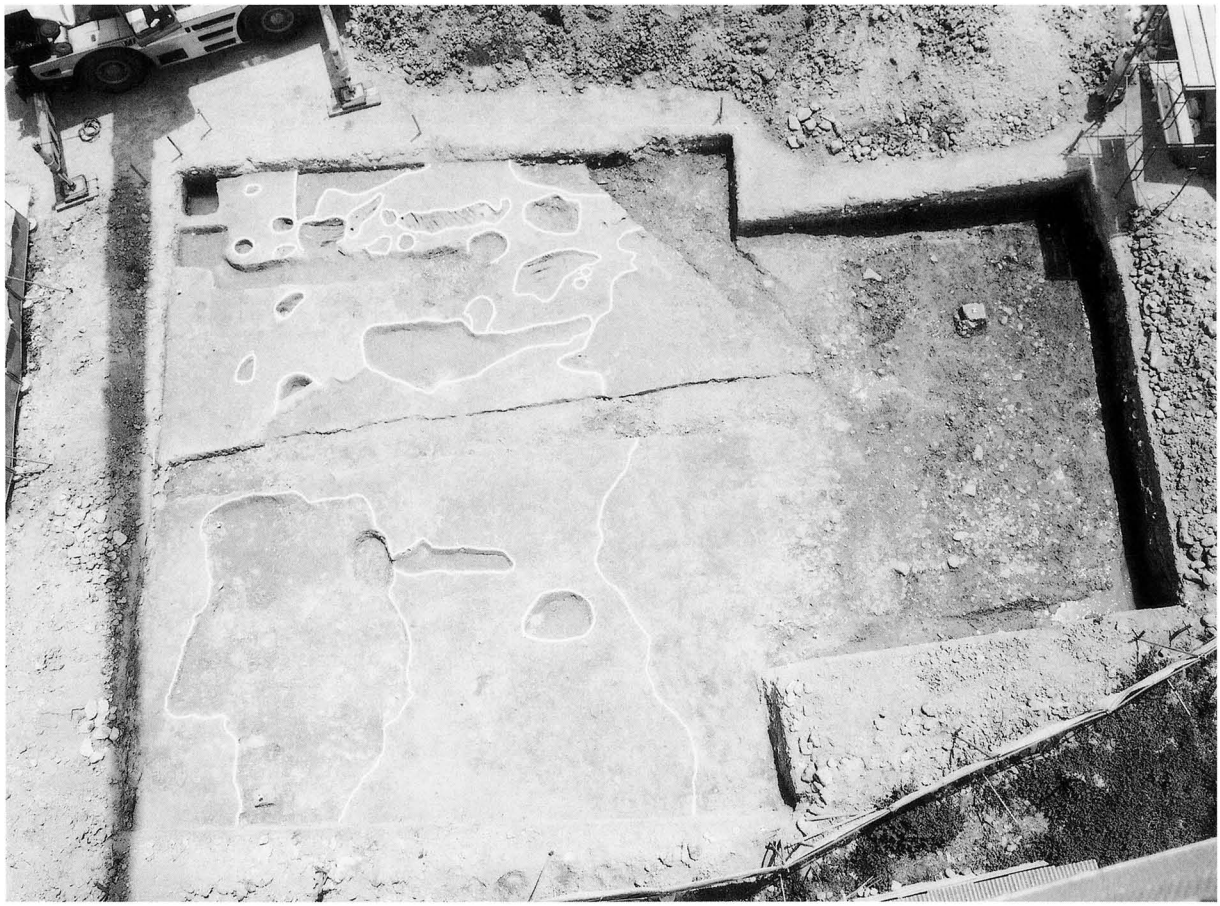
第14図　三日市北遺跡遺構配置図（1/800）

図　　版

図版1　三日市北遺跡（MIN05—3）

調査区検出状況（南から）

調査区完掘状況（南から）



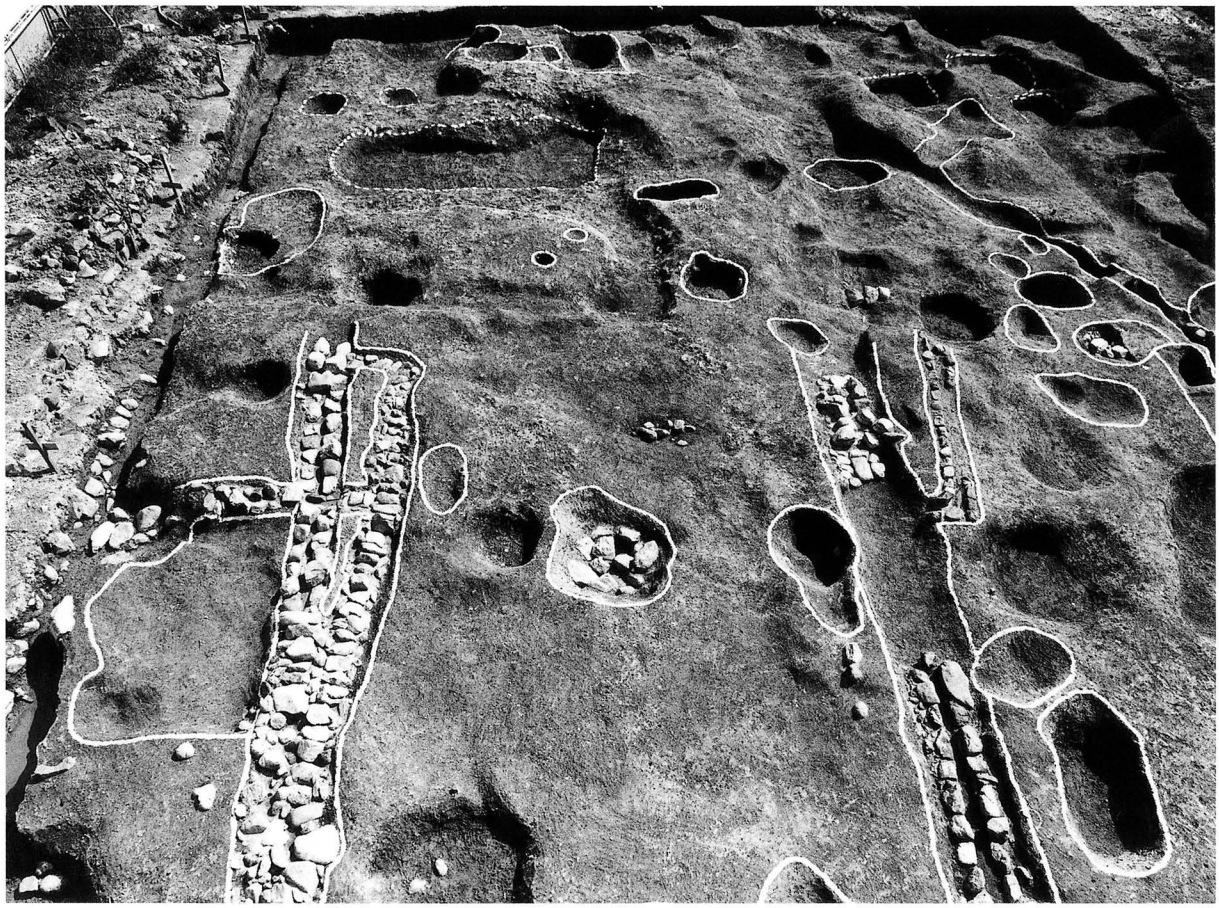
調査区全景その１（上から）

調査区全景その２（上から）

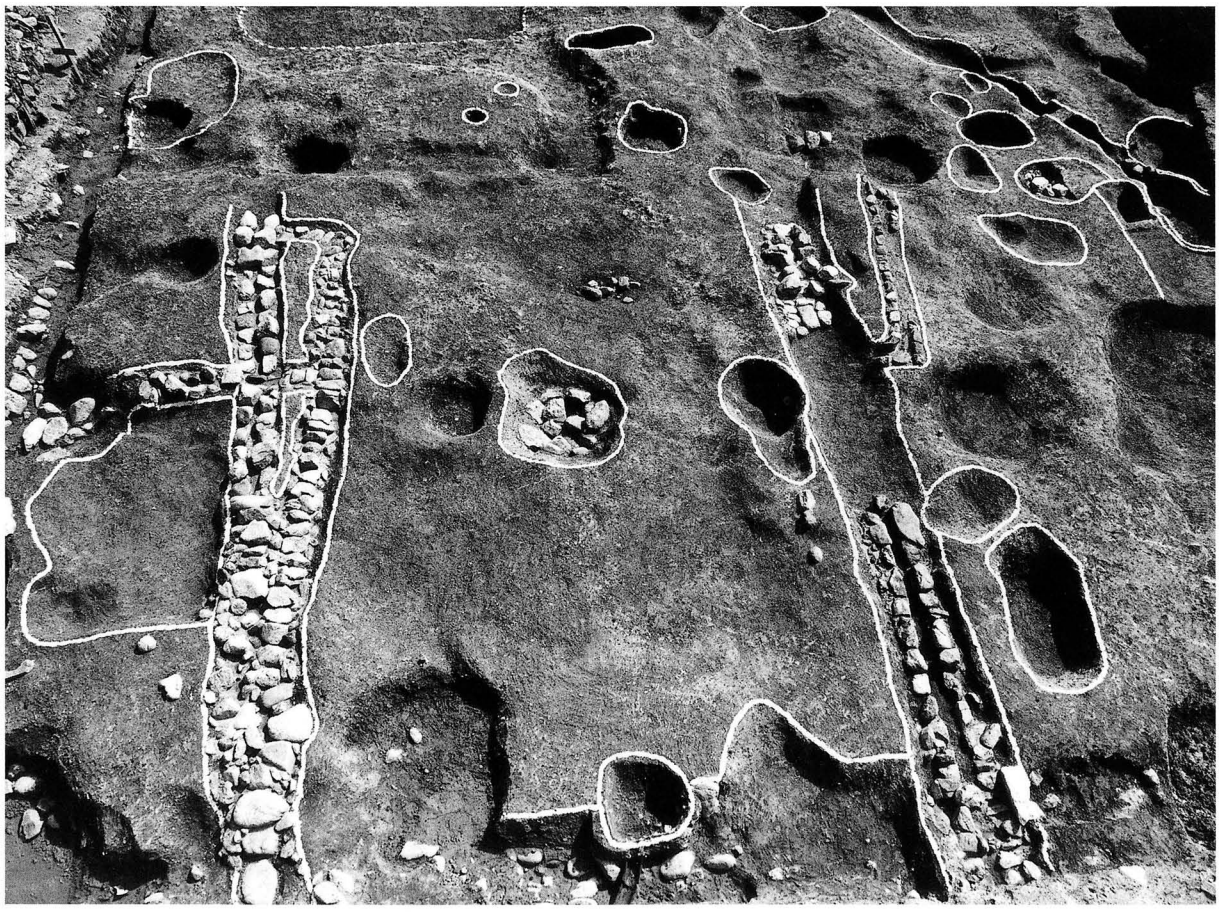
ＮＶ１土層断面その１

ＮＶ１土層断面その２

図版4　三日市北遺跡（MIN05—4）

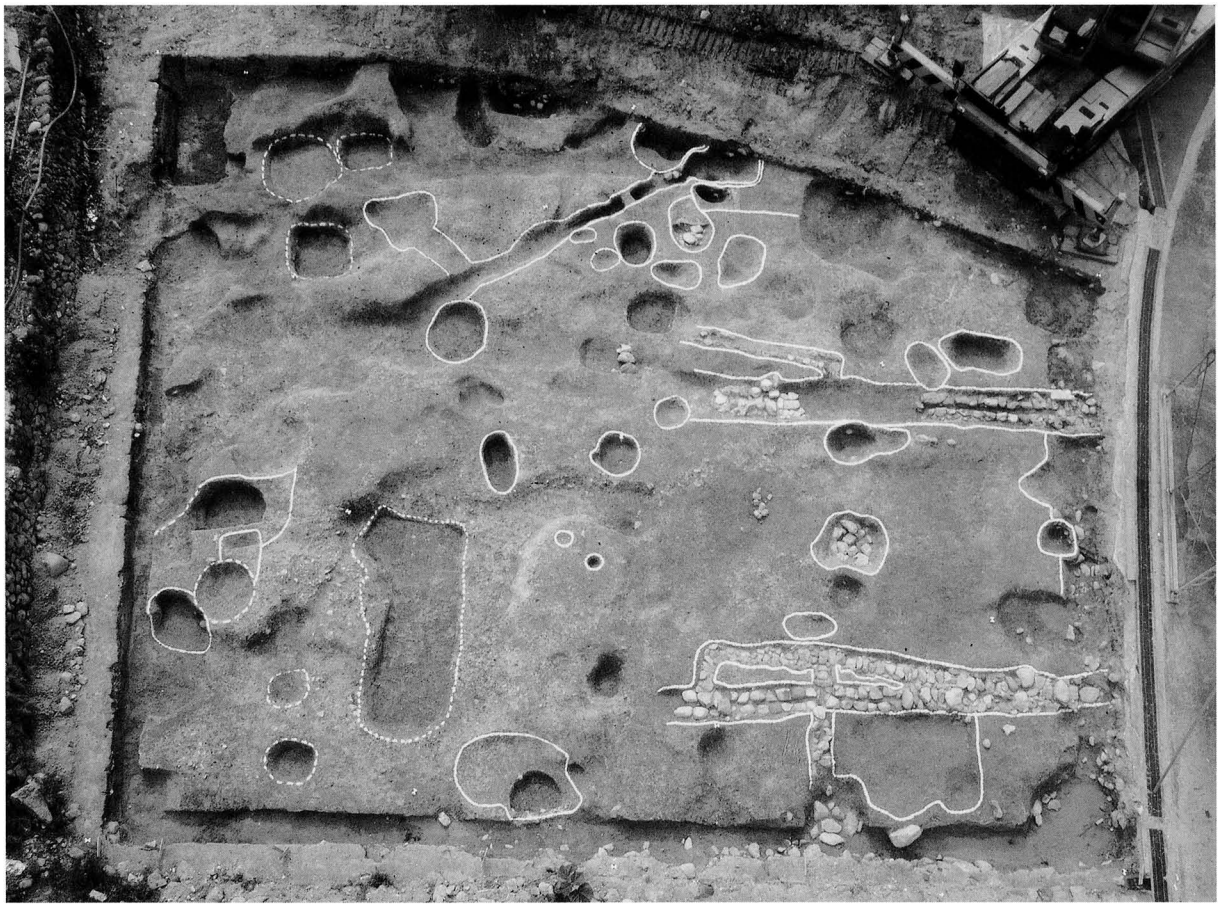


調査区完掘状況その１（西から）



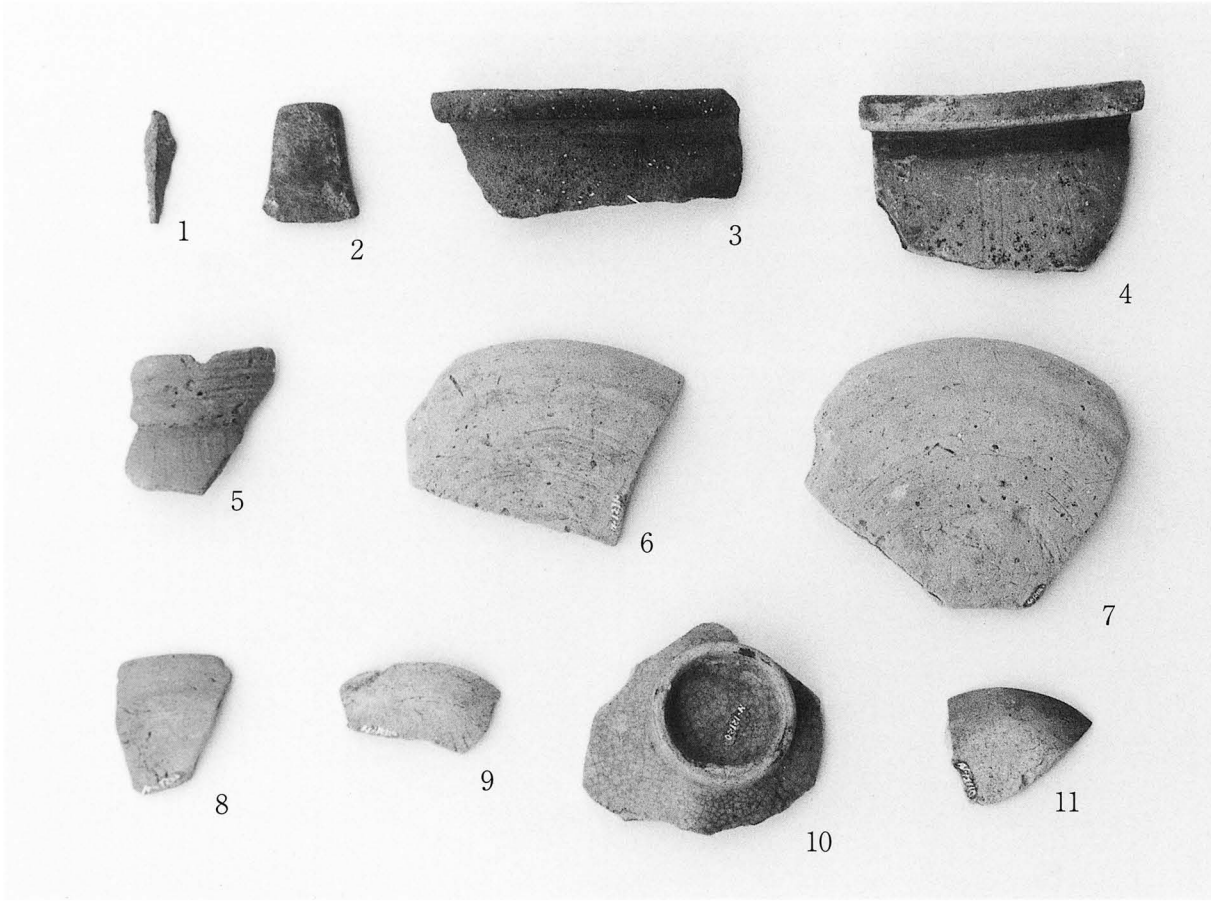
調査区完掘状況その２（西から）

図版5　三日市北遺跡（MIN05－4）

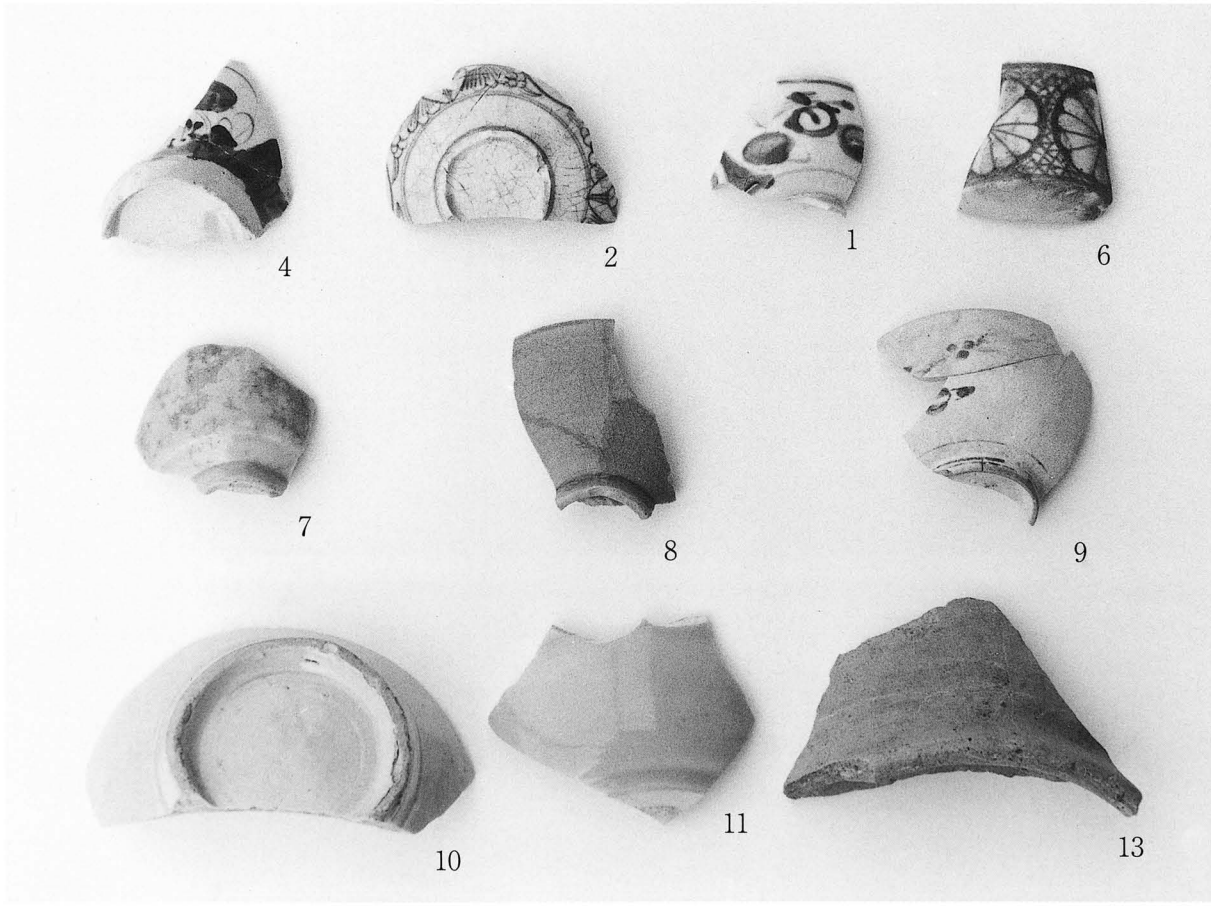


調査区全景その１（上から）

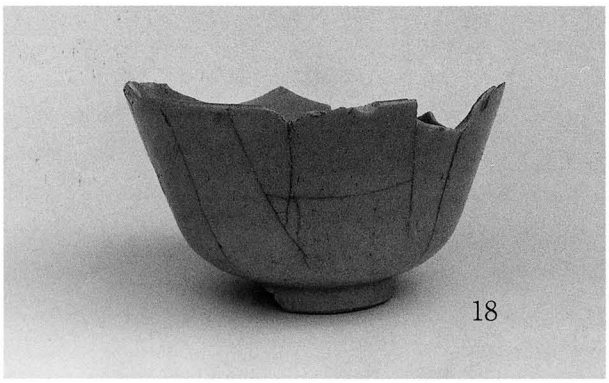
調査区全景その２（上から）



MIN05－3



MIN05－4


18

14

15

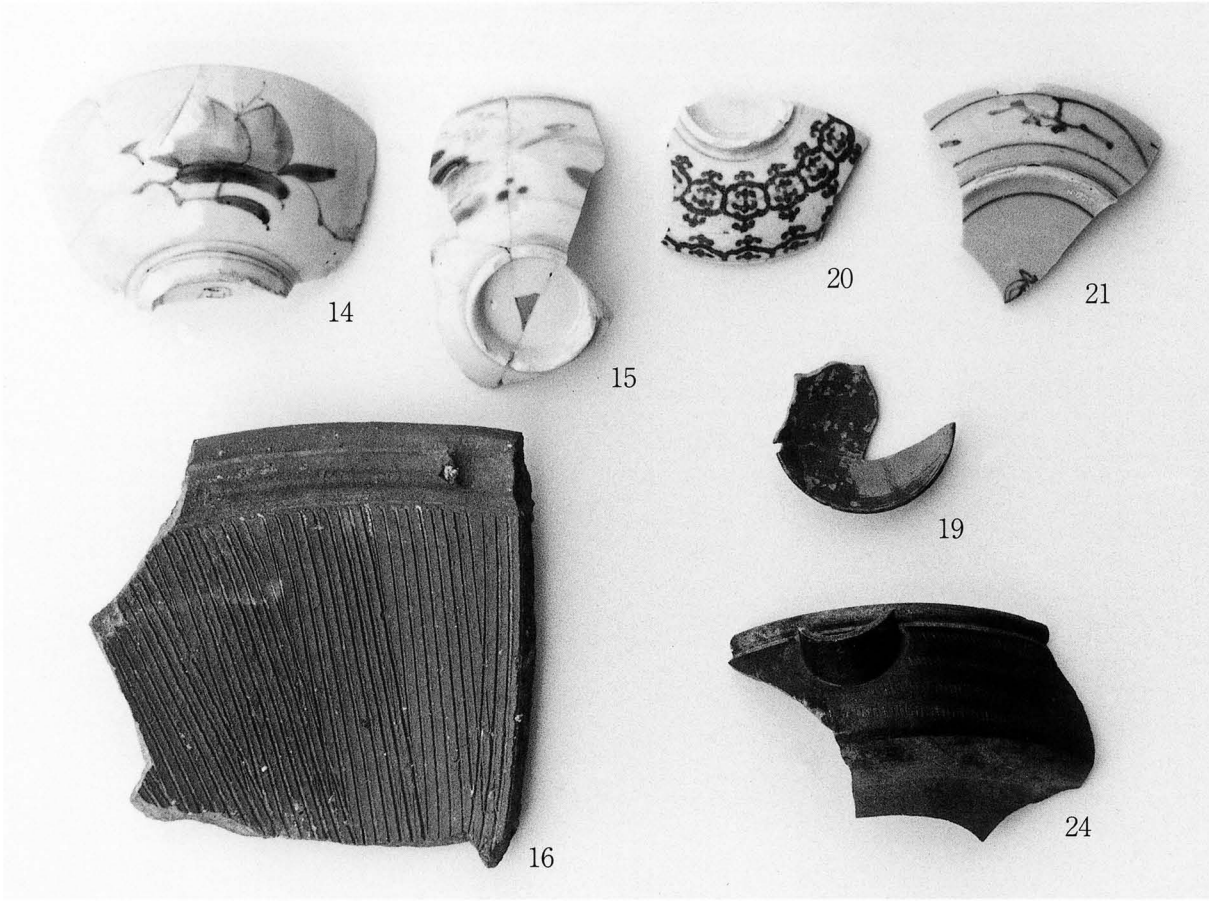
22

17

23

25

図版9　遺物　三日市北遺跡（MIN05—4）



報 告 書 抄 録

ふりがな	みっかいちきたいせき　さん
書名	三日市北遺跡Ⅲ
副書名	河内長野市埋蔵文化財調査報告書ＸＸＶ
シリーズ名	河内長野市文化財調査報告書
シリーズ番号	第46輯
編集者名	太田宏明
編集機関	河内長野市教育委員会
所在地	〒586－8501　大阪府河内長野市原町一丁目１番１号 TEL0721－53－1111
発行年月日	2007年３月31日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
三日市北遺跡 三日市宿跡	大阪府 河内長野市 三日市町	大阪府 河内長野市 三日市町	府171 河141	34° 26′ 00″	135° 34′ 18″	H17.7.5 ～ H17.10.31	約500㎡	駅前再開発 事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三日市北遺跡 三日市宿跡	集落	弥生～近世	落ち込み 土坑	弥生土器 陶磁器	弥生時代集落遺跡の南限が明らかになった。

河内長野市文化財調査報告書第46輯
河内長野市埋蔵文化財調査報告書ＸＸＶ

三　日　市　北　遺　跡　Ⅲ

2007年３月31日発行

発行　　大阪府河内長野市原町一丁目１番１号
　　河内長野市教育委員会
　　0721－53－1111
印刷　　（株）近畿印刷センター